

島根県柔道連盟

これまでのあゆみ

昭和24年に全日本柔道連盟が結成され、本県においても柔道愛好家が結集し昭和25年、島根県柔道連盟は初代会長福岡重徳氏が就任し設立された。翌26年から田部長右衛門氏が二代会長に就任。昭和45年武道の殿堂「島根県立武道館」の建設に尽力され、これにより島根柔道の礎ができた。三代会長に成相善十氏、錦織邦明氏、岩見裕至氏、小村和紀氏と続き、平成26年より七代会長山藤哲夫氏が引き継いでいる。

昭和57年にしまね国体（くにびき国体）の開催が決まり、大会を成功するにあたり昭和52年、岩見裕至氏（当時理事長）は、機関紙「島根柔道」の発刊による組織の充実、競技力向上の一環として県ナンバーワンを決める体重無差別による柔道選手権大会を開催。一方で強化と将来を担う青少年の国際感覚の育成のために、韓国釜山の高校生との柔道試合交流を実施した。また、基金を設立して財政基盤の強化を図った。迎えたしまね国体は成年男子準優勝、少年男子5位という大成功を収めた。東奔西走する困難さもあったが、現在の連盟の基礎に繋がった。



昭和57年くにびき国体 成年・少年男子

現在の状況

平成8年に国立三瓶青年の家に「文武伝承館」が竣工し、平成9年には浜田市に「島根県立石見武道館」が竣工した。これにより県内3カ所に拠点ができることで地域性を加味した、効率の良い強化・普及が可能となった。この充実した環境と、しまね国体成功のノウハウを活用し、ポスト国体に向けた取り組みとして全国大会を誘致した。

平成13年（浜田市）、平成22年（松江市）に全国中学校柔道大会を開催。平成28年には全国高校総体柔道競技（出雲市）を開催した。それぞれの大会で入賞もあり、大会運営及び競技役員の養成と、強化に大きな収穫があった。また、長期展望に立って将来土台となる幼児、小学生には、中央講師を招聘しての全柔連主催事業「みんなで柔道」（柔道教室）を東部（県立武道館）西部（石

見武道館）交互に毎年開催し、中高生には日本武道館主催事業の「錬成大会」を開催。基礎・基本を重点に指導を受け、切れ目のない強化を図っている。

2030年に2度目の国体、第84回国民スポーツ大会「島根かみあり国スポ」が開催されることが決定された。折しも令和5年10月、かごしま国体において下田尚監督（しまね国体成年選手）率いる開星高校が少年男子準優勝を成し遂げた。しまね国体後41年にしてこの快挙は、来る「島根かみあり国スポ」成功に向け、一致団結の源となり誓いを新たにしたい。



令和5年かごしま国体 準優勝（少年男子）

一方で本県選手の国内外の冠大会での優勝、入賞などの活躍がある。高校から大学、あるいは企業へと進み、それぞれの目標に向かって日々鍛錬する姿勢に敬意を表するところである。これも中高の指導者が連携を取り合った結果であろう。競技人口の減少の中、この連携を密にしていくことが肝要であり、継続して取り組んでいくことを期待する。選手各位におかれては今後益々、研鑽を積み日本柔道を牽引していくことを願うものである。

これから

まず、取り組むことは登録人口の減少対策である。その原因はさまざまにあると思うが、少子高齢化、そして3年間に及ぶ新型コロナウイルス感染症による活動制限も大きいと考える。

「柔道は人間教育」を提唱している全柔連の「柔道ルネッサンス」「柔道MIND」事業を重視した取り組みや、日本武道館事業及び全日本柔道連盟主催事業の協力を仰ぎ、指導者資質の向上、安心・安全な指導法など、研修会を企画することが対策であると捉え、取り組んでいきたい。そして、しまね国体の人的財産が在るうちに後世に伝え、更に進化した「柔道島根」を築きたい。そのためにも、この度の「かごしま国体」準優勝の選手や、現在大学及び企業で活躍している選手達の受け皿となる母体作りを検討していきたいと考える。

先達の気概を心に刻み、「万里一空」（やるべきことを見失わず励み、頑張り続けること）の精神を固持し取り組んでいく所存である。